

ピーターパン便い



発行責任者：小野ロー 編集責任者：宇賀神慶子

「家庭的養護に向けて～CHANGE MYSELF～」

施設を巣立っていく卒園生が在園生にむけて「こんな私が変われたのだから、みんなもきっと変われます。頑張ってください」と挨拶をしました。彼女は入所するまで地縁、血縁、職場縁を断ち切った閉鎖的で排他的な家庭の中で育ち、偏った親の価値観の中で学校に通うことも出来ませんでした。しかし、ネバーランドに来て、学校に通い、友だちが出来、戸惑うことの多い中で沢山のことを学び変わりました。多くの人たちとの関わりの中で変わっていった自分が高校を無事に卒業し、新たな夢の実現のために飛び立っていかうとしている自信なのだろうと思いました。

本来、子どもの育ちを保障するとは、核心としての命の尊厳を基本とし、一人ひとり違うということを互いに知ること、関わりを通してその違いに折り合いをつけていくこと、さらに自分自身が変わっていくことを保障することなのだと思います。つまり、児童憲章に掲げられる「社会の一員として重んぜられる」ということであり、生存権の保障の一部なのだと思います。

今、家庭的養護が推進され、里親委託、施設の小規模化が進んでいます。このような状況の中で、私たち大人は同調や同化を子どもたちに押し付けてしまっていないでしょうか。子どもたちの発言をありのままに受け止め、子どもの変化や成長の後押しができているでしょうか。私自身、日々、子どもたちからハッと気づかされ、考え方を变えることも度々です。子どもたちの変化のように大人も柔軟に変わらなければならないと痛感しています。

(施設長 宇賀神慶子)

かぞくてなんだ？いっしょに住むとかぞく？離れて住んでもかぞく？血のつながりがかぞく？

つながってなくてもかぞく？人間じゃなくてもかぞく？同じところで笑うとかぞく？ケンカしても

かぞく？愛し合うとかぞく？大キライでもかぞく？だれとかぞく？どこまでかぞく？(日テレ)



(平成 27 年 5 月 5 日 こどもの日「社会の一員として重んぜられる」児童憲章)

ネバーランドが開設して 10 年を過ぎました。開設当初、友だちが少ないことが心配された子どもたちも、今では幼稚園に通園したり、スポーツ少年団に入団したり、放課後に学校の友人とサッカーを楽しんだり、近所の悪仲間とつるんだり...それぞれが施設の枠を超えて色々な人たちとの関わりを持てるようになってきました。

そこで今年の子どもの日はテーマを児童憲章の「社会の一員として重んぜられる」とし子どもたちと「社会の最小単位：家族ってなんだろう」「もっと広い社会：地域ってなんだろう」についてワークシートを用いて勉強会を行いました。

(文責：宇賀神民代)



《 妖精ユニット ～幼児・小学生（低学年）男児 12 名～ 》

今回のワークを行うにあたって、はじめに幼児や小学校低学年の子どもたちに「家族」という概念をどう教えよう？と迷いました。しかし、実際に活動が始まると子どもたちから様々な意見が出され、私自身、とても驚き、また考えさせられました。

「家族はだれ？」というワークでは「パパ、ママ、ばあば、おねえちゃん、おばあちゃん」といった肉親のほか「えんちょうせんせい、しょくいんさん、〇〇くん」などの意見が出ました。今現在、一緒に生活をしている大人や子どもの名前を挙げる児童が多くいたことに驚きました。

「家族について思うこと」という質問では「やさしい」「だいすき」「ちょっと怒ることもある」「会いたい」「ママに会えるのがうれしい」「いつもは会えない」「さみしい」といった肉親への素直な気持ちと願いが込められた回答が多く見られました。

「今まで関わった人たち」については「ネバーの〇〇さん」「にゅうじいんの〇〇さん」「〇〇先生（学校・幼稚園）」「しゅづつの先生（病院）」「更女のおばちゃん」「栃木エスシー」「ケーキ屋さん」「セカンドハーベスト」「キョロちゃん（お菓子）のおじちゃん」「パチンコ屋さん」など書ききれないほど沢山の名前が挙がりました。小さいながらも自分たちを支えてくれている大人の存在を認識していることに気づかされました。

今回のワークは、子どもが家族について考え、同時に家族に対する気持ちを表現するそして自分に関わってくれた人たちを振り返る良い機会となったと思います。

私たち職員も子どもたちの嬉しい気持ちや逆に寂しい気持ち、また家族と思ってもらえているという事実を知って、より一層子どもたちのために日々努力しなければいけないと感じました。

（文責：齋藤泰子）



《 人魚ユニット ～小中高生女兒 12 名～ 》

年齢幅の広い人魚ユニットでは、小学生と中高生の違いが顕著に表れていると感じました。

「家族って誰？」という質問では、自分の両親、祖父母、兄弟をあげる児童が多く見られました。しかし、中高生の中には家族に兄弟をあげるものの両親を入れないなど複雑な心境が見受けられました。

「家族について思う事」という項目では、小学生からは「でんわをかけてみたい」「ママに会ってみたい」「何で泊まり行けねんだああ！」という素直な気持ちが出されました。「家族」への期待や憧れが強く、施設で生活をしていても常に心の中にあるのは肉親の存在だということを再認識しました。

一方、中高生は「良い人」「会いたい」「相談できる」と言いつつも「お前何？」「気を使ってしまう」「幸せでいてくれればいい」などと自分と家族との間に距離を感じていたり、葛藤していることが手に取るように分かりました。



そんな子どもたちのやり切れない思いや寂しさに、私たち職員は真っ直ぐに向き合い子どもたち一人ひとりの思いを受け止め、これからの未来に希望が持てるよう力を尽くしていきたいと強く思いました。



また「今まで関わった人」という項目では、中高生を中心に、地域、ボランティア、児童相談所の方々など子どもたちを取り巻く様々な方たちの名前があがりました。沢山の方たちが子どもたちを見守り、支えとなり、育んで下さっていること…。このような方たちとの繋がりをこれからも大切にしていき、私自身、多くの方々の支援があることを忘れず、感謝の気持ちを持ち続けようと思います。

（文責：細岡美紗）



《 宝島ユニット ～小学生（高学年）男児 6 名～ 》

「家族について思う事」という質問に「連絡したい」「家に帰りたい」「名前を知りたい」と書かれていました。思春期の入り口にいる小学高学年の子ども達に、彼らの知る権利をもっと大切にしたいと感じた回答でした。

また「今まで関わった人たち」との欄には、様々な人達の名前が書かれていました。施設の子どもの名前や職員の名前だけでなく、学校の友達や先生の名前、スポーツ少年団の友達や指導者の名前なども書かれており、子ども達が地域社会に大きく踏み出している様子が感じられました。さらに個々の回答を見ていくと、病院の先生の名前や「せかいじゅうのみんな」等と書かれていて、それらの回答から色々な人とのつながりを大切にしたり、また感じていたいと思う子ども達の心境を読み取ることができました。

私達はその子ども達の気持ちを大切に、日々寄り添っていきたいと思います。

（文責：饗庭拓也）



《 精霊ユニット ～中高生男児 5 名～ 》

精霊の村ユニットの子ども達のワークシートを見ると「ああ、ちゃんと悩んでいるのだな」と感じさせられることが多く書かれていました。

「家族はだれ？」の質問に、親や兄弟の名前を書いて家族とは認めるものの、次の「家族について思う事」という質問では、親に対する反発の言葉が並びます。その一方で「一緒に住みたい」と書く子や何も書けないでいる子もいました。中学生になり、今まで親に抱いていた憧れの感情から、憧れだけではない別の感情を言葉として出せるようになってきたのです。一緒に住みたいと書いた子は、その後に「でも高校卒業するまでは無理なんだよ」と話しました。

「今まで関わってきた人」の項目では部活動やスポーツ少年団の監督やコーチ、保護者の方々の名前が上がる。改めて地域に育てられていると実感させられ、関わりの大切さを感じます。また、友達が少ないと思われがちな子の欄には、今までの学校のクラスメイト全てと書かれていました。友達とうまくコミュニケーションが取れずに悩む事の多い子ではありますが、クラスへの所属意識は人一倍あり、それがより一層この子を悩ませているのかもしれない。

どのユニットもそうかもしれませんが、子ども達は常に様々な悩みを抱えています。その悩みを我々職員が子ども達に寄り添いながら、一緒に乗り越えていけるようなケアを心掛けて日々の職務に当たりたいと思っています。

（文責：小山裕介）



《 地域小規模くがの家 ～小中高生男女混合 6 名～ 》

家族について「苗字が同じだと家族」「一緒に住んでいるのが家族」「仲良くお出掛けするのが家族」。両親、兄弟、祖父母など肉親をあげる子どもがいました。また「ペットや育ててくれている人も家族？」と乳児院の先生や私たち職員も家族の一員と考えてくれた子どもまでいたのは、とても嬉しかったです。

さらに、中高生は自分自身のことをお互いに話しました。「一度は実父に会いたい」と一人が言うと「片親でも会えるお前らはいいよ。俺なんて別に会いたくないけど、もう会えないし...」と話す児童もいました。聞いていて切なくも感じましたが、ここまで自分自身の事を語れるようになった成長をうれしくも思いました。

職員として、日々の生活の中で子どもの言葉や表情、つぶやきなどにアンテナを張り、敏感に受け止められるようにになりたいと思います。

（文責：仲江川徹）



食育『命をいただき、命をつなぐ』（平成27年5月5日）

5月5日は「こどもの日」です。今年も給食会議では行事食の献立について様々な意見が飛び出しました。

「“鯉の滝のぼり”という言葉があることだし“鯉の姿揚げ”はどうですか？」

「子どもたちの大きな成長を願うという意味でも良いですね」

「生きた鯉を子どもたちの目の前でさばくのはどうですか？」

「子どもたちに生き物から命をいただいていることを教えたいですね」

「生きている鯉が目の前で死んでいく姿を見せるのは残酷ではないですか？」

「でも、人間が生きるためには動物や植物を食べなくてはならないということを子どもたちに伝えるべきですよ！」

体験を通して子どもたちは何を学ぶのでしょうか…。



「かわいい！」

「生きてる～」

「僕、さわれるよ！」

「口がパクパクしてる！」

養魚場から届いた鯉を見て子どもたちは大騒ぎ。



チューだって
できるもん！



調理員さんが鯉をさばき始めました。

「血が出てる！」

「かわいそう！」

近くでじっと見つめる子、怖くて遠巻きに見る子。子どもたちの眼差しは真剣です。

さっきまで水の中で泳いでいた鯉がだんだん動かなくなっていく。うろこを取り、内臓を出す。

調理員さんの手の動きから一瞬たりとも目が離せません。

「鯉は“おいしく食べて”と言っているんだよ」

調理員さんの言葉にホッとした顔の子どももいました。



- ・鯉の姿揚げあんかけソース
- ・中華ちまき
- ・スティックサラダ
- ・筍のすまし汁
- ・いちごミルク

旬の食材を使った料理がテーブルを飾りました。

普段、魚が苦手な子も骨が多く泥臭さとクセのある鯉を「おいしい！」といって残さずキレイに食べていました。

今回の行事を通して、子どもたちは『命をいただき、命をつなぐ』ということを学んでくれたように思います。

（文責：給食会議メンバー）

つながる想い『夢の国ディズニーランド』へ

平成 25 年ネバーランドのポストに一冊の聖書とともに浄財が贈られました。子どもたちと話し合った結果大切な浄財は『夢の国ディズニーランド』へのチケットとなりました。また、この話を耳にしたYさんから子どもたちが存分に楽しめるようにと浄財を頂戴しました。初めてのディズニーランドに子どもたちは大喜び。アトラクションを楽しんだり、一緒に踊ったり…。ポップコーンを抱えて「幸せ～」と歓喜の声を上げる子もいました。



それから 1 年後、ディズニーランド旅行の話を聞いた鹿沼市社会福祉協議会の方のご厚意により再びディズニーランドのチケットを頂戴することとなりました。

2 度目のディズニーランド。1 度目で体験しきれなかったことも余すことなく楽しみ、子どもたちはとても素敵な時間を過ごすことができました。

やがて、子どもたちを思う温かな心に触れた児童から「お礼をしたい」という言葉が聞こえてきました。「どうやってお礼をする?」「手紙を書く!」「でも住所も名前も分からない」「じゃあ…」こうして平成 26 年度施設文化祭の演目は「ディズニーレビュー」に決定しました。

子どもたちは感謝の気持ちをオペレッタで精一杯表現することができました。



人から人へ…。誰かを思う優しい気持ちは繋がっていきます。子どもたちが頂いた『夢の国ディズニーランド』のチケットは子どもたちの『心の輝き』のチケットでもあるように思います。

(文責：宇賀神民代)

たくさんのご寄付・ご寄贈ありがとうございました。

《個人》

阿久津マキ子 浅野功義 荒川一志 荒川芳夫 岩出正行 宇賀神節子 宇賀神紀子 内田利江 大木美幸 荻原明信
荻原志美 小山仁子 加藤雅子 金崎芙美子 神山由美 黒瀬笑子 小平光志 後藤久美子 小林隼也 小林久美
坂本倫志 鈴木栄子 関口照子 高橋真由美 中津有美子 野田美子 長谷川万由美 福田京子 福田幸子 福田ミヨ
堀越敏夫 堀越弘美 門司一徹 安本ヨシイ 山崎久子 吉田美津代 ルイーシ

※ 匿名の方からも頂戴しております。感謝申し上げます。

《団体》

AQUAコーポレーション NPOあかり アースクレーン アトリエピッキ 安納スウィーツファーム イエロース
タジオ 上野玩具製作所 宇賀神内科医院 オアシス家庭教育学級 お菓子の工房ローシェ 興文堂書店 荻原呉服店
カーブス カゴメ 鹿沼市更生保護女性会 鹿沼市社会福祉協議会 鹿沼東ロータリークラブ 鹿沼ファミリー劇場
菊花産業 北押原地区民生委員児童委員協議会 北関東マツダ 光明寺 島田酒店 スナックフードサービス ダスカ
ジャパン 田野井ミナミオートサービス チュチュアンナ 日光森と水の会 日本鏡餅組合 日本出版販売 のざわ米
店 バイク愛好会 ハウザー ひざつきフルーツ フードバンク宇都宮 フードバンクとちぎ フラワーヒルズ プレ
ナスホットモット 堀金 毎日新聞東京社会事業団 ムーンバット モルテン大阪支店 有楽会館 ゆうちょ銀行広報
部 喜今日 ライブガーデン鹿沼 ライブガーデン鹿沼グランドシティ ライン鹿沼 楽天 ワンズモータースクラブ

*平成26年5月5日から平成27年5月31日までの方々です。五十音順・敬称は略させていただきます。

社会福祉法人仁篤会理念

児童福祉法および児童憲章の精神に基づき、環境を通して
個性の豊かな子、創造性の豊かな子、実践する子を育む。



児童養護施設ネバーランド理念

われらは、日本国憲法の精神にしたがい 児童に対するただしい観念を確立し すべての児童の幸福を
はかるために この憲章を定める。 ・児童は人として尊ばれる ・児童は社会の一員として重んぜら
れる ・児童はよい環境のなかで育てられる (児童憲章 S26.5.5 制定)

児童養護にあたっては、児童の最善の利益が主として考慮されるものとする。子どもの権利条約の精神
に基づき、子どもの人権を擁護します。とりわけ、知ること、意見を言うこと、選ぶこと、暴力から守ら
れることを基本理念として養護にあたります。

編集後記

自分の固定観念や価値観に捉われていると子どもたちの
本当の心は見えない…。今年も大切なことに気づかせてもら
いました。

子どもたちとの日々に感謝しながら「ちゃんとした大人」
として関われるよう自己研鑽していきたいと思います。

(饗庭・宇賀神・小山・齋藤・仲江川・細岡)

発行元

社会福祉法人仁篤会 児童養護施設ネバーランド

〒322-0523 栃木県鹿沼市下奈良部町 1-81

TEL : 0289-71-1103

FAX : 0289-75-5363

e-mail : ccw-neve@one.bc9.jp